

武家名目抄

職名部

三十八

和書門	二五二の六	七	七	四九冊
類	函	架	冊	

内閣文庫	和書	二五二の六	四九冊	一五三函
類	架	冊	架	架

内閣文庫	番號	和	25206
	冊數		457 ( 39)
	函號		153 275



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



御弓始奉行

椀飯奉行

御憑奉行

又稱御憑右筆

唐物奉行

旬御鞠奉行

御的奉行

御憑摠奉行

御憑使

貢馬奉行

相撲奉行

又稱八朔奉行

武家名目抄第廿八冊

職名部廿一

御弓始奉行

吾妻鏡云建仁三年十月九日甲辰及晚

有御弓始北條五年郎為奉行圖書允清定

注矢貞和田左衛門尉義盛献的云々

又云承元三年正月六日庚子有御的始

左衛門尉義盛奉行之

又云寬喜元年正月十五日御弓始伊賀四郎左衛門尉奉行之

按伊賀四郎左衛門尉ハ侍所所司ナリ

又云曆仁元年正月廿日丁卯御弓始也今

年依可為御物忌不可有此儀之由窮冬雖

被定故被遂之射手事昨夕俄於御前被仰

合于如始義村為催促被下日記於陸奧太

郎云々

按陸奧太郎ハ侍所列當小隱實時有後掃部助越後守リ但云々

又云寶治二年後十二月廿日癸亥明春正

月御弓始事為試其堪否陸奧掃部助今日被

催射手等云々

又云建長三年正月八日己巳由比濱御弓

始被撰射手陸奧掃部助監臨之四年十一

月十八日戊戌來廿一日於新造御所依可

有御的始今日被催其射手陸奧掃部助實

時奉行之

又云康元元年十二月十三日康午明春正

月御の始射手等被差定之被下御教書越後守奉行之

又云弘長元年正月九日辛未於前濱有御の始射手之試相摸太郎殿令監臨給工藤三郎右衛門尉光泰候御供奉行之越後守實時故障子息四郎主相具平岡左衛門尉實俊行向同奉行云々射手十二人一五度射之十四日丙子御の始射手十人二五度

射之今日越後守不出仕相摸太郎殿一所令奉行之給云々十一月十日癸酉明年御の始射手事被差定之相摸太郎殿越後守等被下奉書  
又云文永二年十二月十八日壬午今日於小侍所明年正月御の始射手以下事等有其沙汰射手有故障等不可有免許由及群

議云々

按以下九條ハ鎌倉將軍家奉行ナリ

御の日記云建武二年正月七日左馬頭  
殿御鎌倉之時御の小侍所澁河殿貞和  
元年正月十五日土御門東洞院御所小  
侍所大高與<sup>豫</sup>州同二年正月九日小侍所  
師直子越後大夫將監師秀同五年八月  
十二日新造御所小侍所上杉左馬助文  
和二年正月廿四日大御所御在鎌倉之  
時御の執事仁木左京大夫小侍所吉良

左馬助同五年二月十三日小侍所細川  
兵部少輔顯氏貞治二年正月十四日六  
角御所執事越前沼部大輔小侍所民部  
少輔應安五年正月廿八日小侍所山名  
彈正少弼永和二年二月廿一日小侍所  
今川上總兵同三年二月廿日小侍所同  
前同四年正月廿三日小侍所山名彈正  
少弼永享二年正月十七日執事右兵衛

尉義淳小侍所畠山左馬助同十三年正月

嘉吉元

十七日小侍所山名右衛門佐持豊文安六

寶徳元

年正月十七日小侍所山名彈正少弼前豊

寶徳二年正月十七日執事畠山左衛門督

長祿元

徳本小侍所畠山左衛門佐義胤康正三年

正月十七日小侍所細川民部少輔教春

此按

一條右衛門尉軍  
家此奉行あり

按此奉行あり鎌倉右大少殿の代りの

將軍家年毎より行ふるを規式あり

小侍所の名目より考ふ此事を多行し其系

事より見て幕府祇候に諸將小侍あり

格様す然るを是に供多宿直等と悉く此

つらき分番し又此考始の村あり

小侍の輩を撰定し從事とせむる

ことあり但承人よりあるは侍所のあし

所目より考此事を沙汰し承人より初め

少侍の事... 諸侍の進退... 彼... 弓始の事... さら... 笠越... 所程... 二月廿日... 十...

足利殿の村... 少侍の事... 世孫... 可... 少...

御的奉行

吾妻鏡云建仁三年十月九日甲辰及晚有  
 御弓始北條五郎為奉行圖書允清定注矢

貞和田左衛門尉義盛献的云々

按矢負を注  
其ふ多涉的

事行の職より此の條より  
強名好幸の事あり

齊藤親基記云寛正七年正月十七日御の事行

貞有元連一番小笠原刑部大輔荒尾治部少

輔

下二番姓  
名略之

及薄暮御太刀進上也

又云文正二年正月十七日御弓場始ユタラウ

小笠原刑部大輔奉行飯兵大飯和

貞有  
元連

蜷川親元記云文明十三年正月十七日壬辰

御の大御所様無御成御門役以御の奉行

松豊  
松對

被仰出之貴殿御勤仕之

殿中申次記云正月十七日御の始在之仍

御太刀

金  
糸

公家少々大名外様少々御供衆

申次當番衆御の奉行等進上之

長祿以來申次記云正月十七日御の始

未事  
刻

日記ニハ弓場始ト書之射手ノ衆六人

三番三  
度弓

也各器出格ハウシ折水干々々ウチヨリ也但



是ハ乳名ニ奉ノ云々應仁乳後ハうりうり  
事ハ勤之古的ニ奉行有人は是等ハうりあり  
何事也

年中宣例記云正月十七日古弓始射手六人  
三者分方様古見物弓場大名外様古世氣  
中次清崎季行彦左下祗候古一ト也く白き  
大うらむハ云々くくして商人古前後のあり  
その是年ハ之古的季行ノ折紙ノ矢數を付

中次

佐竹宗三関書云清和的の相ノ古是年ノ古日ハ  
中次く前より定事ノ古一古彦子古をりて  
あつ古的奉行書云く古當彦子古定事ハ  
あり又系勤次第ノ定事ハとあり古古郎の  
事ハ古前より定也

按以上七條古古形  
将軍ノ古奉行あり

徳倉年中行事云正月十七日御的アリ公  
方様御覽セラル大御所様御臺様御袋

様上臈以下御女房夕チモ御見物アリ管  
領御評定所ヨリ見被申諸奉公中ハ御中  
門ノ御縁ニ有祠候也矢數記録ノ右筆ハ  
白洲ニ致祠候人數并中外ヲ見テ記之上  
代ハ五番五度弓ニテ射手十人近代ハ三  
番三度弓ニテ六人也

按廿一條も鎌倉公  
方家乃有司あり

按此奉行ハ之ノ奉行人ノ事ノ強ニ  
事ノ始メ夫負之任今法ノ事ノ如ク

大鎌倉殿の如より其職掌あり事ハ二  
人ノ定まり事ノ法的奉行也以テ名乃  
以テ事ノ事室所殿の時ニ事ノ事  
侍所所司事始まり事ノ事  
清役乃人數を撰定一其日事行ハ事  
給事一ノ事仁事事事事事  
所を事事事事一ノ事事事事  
事の奉行ハ沙汰事事事事事事事

七方より其准授をありしを

椀飯奉行

吾妻鏡云建保元年十二月廿一日辛未明  
春正月椀飯事殊可令結構之旨被仰付雜  
掌等近年度々雖有魚品之咎猶無刷之分  
仍別及此沙汰行<sup>光</sup>奉行之  
抄廿一條ハ強名將軍  
素の奉りあり  
齋藤親基記云寛正六年十二月廿日飯左  
大之種一方内談衆御免仍御祝方椀飯方

一方上表則御祝方被仰付貞有御太刀自  
御未進上椀飯方被<sup>仰</sup>付元連同所

又云文<sup>正</sup>元年正月一日椀飯管領<sup>政</sup>奉行

兵大貞有元連二日土岐三日六角<sup>抄以上二條  
より京神</sup>

申事の奉  
りあり

鎌倉年中行事云正月朔日椀飯ハ管領ヨ  
リ參椀飯奉行直垂ニテ出仕是ハ右筆勤  
之管領代官ト兩人御中門ニ令伺公公方

様出御御酒式三献御酒ヲ申時御一家ノ人  
銀劔持參管領御代官手ヨリ直ニ被受取  
也其後弓征矢ヲ役人持參其次ニ沓行騰  
ヲ役人持參イタシ罷出云々二日椀飯相  
州守護ヨリ一年房州之守護ヨリ一年隔  
年參椀飯奉行如朔夜參銀劔弓征矢ヲハ  
二日同三日夜ハ椀飯奉行代官ノ手ヨリ  
受取テ役人ハ渡也沓行騰ヲハ代官ノ手

ヨリ直受取テ持參アル也御劔弓征矢自  
代官手役人直受取事ハ管領職ニ限也其  
外ハ皆々先椀飯奉行受取テ可渡役人七日  
御椀飯ハ自政所參仍銀劔計參テ御弓  
征矢沓行騰御馬等ハ不參十五日御椀飯  
自上總一年自下總一年參然間千葉介方  
進上椀飯奉行千葉介方代官參銀劔弓征  
矢沓行騰御馬二匹前如記進上之  
條按此一  
ハ鎌

言少方家の  
幸行多

按梳版を献するは正月元三及七日十五  
日王<sup>ノ</sup>く<sup>ニ</sup>奉<sup>ル</sup>行<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>り<sup>ニ</sup>舊式<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>重  
恒例<sup>ノ</sup>大儀<sup>ナ</sup>り<sup>ニ</sup>鎌倉<sup>ノ</sup>殿<sup>ノ</sup>付<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>小條<sup>氏</sup>も<sup>ト</sup>人  
了<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>三浦<sup>小</sup>山<sup>守</sup>都<sup>守</sup>官<sup>ナ</sup>事<sup>ト</sup>以<sup>テ</sup>名<sup>也</sup>也<sup>ト</sup>此  
輩<sup>ノ</sup>沙<sup>汰</sup>一<sup>ノ</sup>献<sup>ス</sup>一<sup>ノ</sup>事<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>梳版<sup>ト</sup>一<sup>ノ</sup>事<sup>ト</sup>  
為人<sup>ト</sup>を<sup>饗</sup>る<sup>事</sup>は<sup>名</sup>曰<sup>ク</sup>酒<sup>一</sup>一<sup>ノ</sup>盃<sup>酒</sup>と  
以<sup>テ</sup>飯<sup>一</sup>一<sup>ノ</sup>梳版<sup>ト</sup>と<sup>ク</sup>事<sup>ト</sup>の<sup>多</sup>多<sup>ト</sup>也

規式<sup>ノ</sup>膳部<sup>ト</sup>を<sup>献</sup>する<sup>事</sup>は<sup>古</sup>の<sup>事</sup>也<sup>ト</sup>事<sup>ト</sup>あり<sup>ニ</sup>  
事<sup>ト</sup>も<sup>多</sup>多<sup>ト</sup>其<sup>式</sup>も<sup>梳版</sup>を<sup>献</sup>する<sup>事</sup>の<sup>事</sup>も<sup>多</sup>あり<sup>ニ</sup>  
凡<sup>進</sup>物<sup>ト</sup>と<sup>梳</sup>一<sup>ノ</sup>刀<sup>切</sup>り<sup>器</sup>馬<sup>具</sup>等<sup>ト</sup>を<sup>献</sup>  
物<sup>ト</sup>も<sup>多</sup>多<sup>ト</sup>一<sup>門</sup>子<sup>身</sup>に<sup>類</sup>を<sup>此</sup>級<sup>ト</sup>  
從<sup>人</sup>も<sup>多</sup>多<sup>ト</sup>足<sup>利</sup>殿<sup>ノ</sup>事<sup>ト</sup>も<sup>多</sup>多<sup>ト</sup>三<sup>管</sup>  
願<sup>口</sup>職<sup>ノ</sup>輩<sup>ト</sup>名<sup>定</sup>日<sup>あり</sup>事<sup>ト</sup>も<sup>多</sup>多<sup>ト</sup>御<sup>事</sup>  
事<sup>ト</sup>も<sup>多</sup>多<sup>ト</sup>何<sup>事</sup>も<sup>多</sup>多<sup>ト</sup>御<sup>事</sup>  
如<sup>事</sup>も<sup>多</sup>多<sup>ト</sup>人<sup>ノ</sup>由<sup>事</sup>も<sup>多</sup>多<sup>ト</sup>梳<sup>版</sup>を<sup>行</sup>事<sup>ト</sup>也

定りしに奉りて執行せしむるに、  
 殿の付ハ此名目より之れと奉り人の御事  
 手職掌よりありしに、  
 御憑使 又稱御憑右筆  
 御憑奉行 又稱御憑右筆  
 御憑使 又稱御憑右筆  
 唐物奉行

伊勢家記云應永廿九年八月一日公家門  
 跡武家御憑進上御臺御方大館駿河入道  
 奉行執筆濱名兵庫助也兩人南向方ヨ兼  
 卅一年七月廿九日御臺御憑大館駿河入  
 道備前入道禪慶 初日記付貞宣○按分方の  
奉行執筆ハトシヨ、伊勢家此  
世職より長上御臺の奉行執筆  
之より殊より記せしむる  
 建内記云正長二年七月廿九日東院僧正  
 光曉為八朔礼物奈良紙百束進之付送間

就御憑奉行付伊勢七郎右衛門尉畢父因  
幡入道奉行之故也

蜷川親元記云文明十五年七月廿日辛亥八

朔上様御方御憑奉行大館治部少輔殿右筆

毛利次郎殿并和筑前守殿御使伊勢掃部助

殿塩冶三河守殿此五人可觸申之由入夜北白河

ヨリ注給之八月朔日辛酉八朔御奉行東山殿

御奉行伊勢守殿右筆

伊勢因幡守  
殿下条殿

御使

伊勢上野介  
殿同与一殿

御所様御方御奉行兵庫助殿右筆

伊勢又七  
殿星野殿

御使

伊勢肥前殿  
次郎左衛門殿

拾芥記云永正十四年八月一日甲辰公武

御憑銀劔進上之武家御頼奉行伊勢右京

亮也御返并被下之

宗子大雙紙云公方様御憑之事惣奉行書

下條殿が御奉行

貞と乃右筆

下條殿が御奉行

貞と乃右筆

子阿五阿多次の

此人せし人吉阿調阿名阿度阿岐阿越阿哉  
阿也所侍重見阿承仕常相也返一一也使方人  
伊勢次郎左衛門伊勢又七郎東山殿也移の後も  
右筆伊勢又七たむらひ伊勢次郎在あつらひほう  
元ありもつかり也其標の也方院殿あまあまあまあま  
伊勢因幡多殿との右筆一皇學官由少補殿ちのくハ  
也そのくハの右筆大館与お中あまあまあまあま  
への也返一一因縁も向ふ也返一一と書て也一一の

色を可書也返一一の也使の也體よふ武也也也ハ  
也兼いひめ一一へハ也のむハ三日系てハ七月毎日  
と八月朔日よ系一一又八月三日よ也返一一の  
也體れり一一又返也一一と書て也返一一の  
もりまのりハ

年中定例記云八月朔日也憑禁裏様一也進  
上目録存大言檀紙一使侍奏也返一一まのりハ  
使回前核家門跡公家大名外様也信流也香流



頭人奉行于外あつてくくを止中返一ノ事

ハハえうひの流く申ふえ返一過ふ出大

方乃職人少は一重の代りく三百百文止あり

人小く里く出ゆ山医師習茂危なきか物

引合たりとくく似合ふ家物出ゆたの書懸を

州伊勢ちうり右筆心大くひ方ハ代り日前傳

後守方に仕ゆ右筆ハさふ申しはゆを年ハ下總

守仕ゆつるめえくひとえ返の物を若羽ゆ事

おきゆを公方様より心覽ききまは是を心たの

らひと申し此流超模ありめえくひ乃同朋元

おハあ是つてあり三日ハ憑今日あつてくく返を

みく此ら里たる物を右筆あ人使人同朋ハ

ちりくく園ありく結ハ先務州ハ可然物代

二色三色傳つてさく丸ハ

御事始記云お公方様法憑ノ事伊勢守系同

苗流勤之七月廿七八日ハ内ハ伊勢守ハはは

魚目奉行伊勢守右軍伊勢因幡守伊勢  
右京免使伊勢与一伊勢之郎左衛門  
此等亦又同用左記  
魚目奉行 本阿弥古河弥直阿弥唐阿弥  
葉阿彌在河弥

澤巽阿彌光秀云八朔方事一書左刀一腰  
香合一所盆一枚而目錄以自筆以香合一法  
盆字亦止少く仕合せり也横川掃部助宗  
興字一酒進一於殿中四點心料五百石以馬

くくの魚一以旅廻也一筋寸一敷升厨斗  
鮫三百本八朔方一信濃一汲一以酒事  
入以才八朔方一土師屋形八朔奉行蛇川花  
人陸忠核河掃部助宗右筆横山雅乐助陸贈  
方猪下行役者林次郎左衛門中村三郎左衛門尉  
自阿彌按屋形とく、  
細川家のあつた 古き世より風俗  
按八朔ぬ物を贈る古き世より風俗  
めく鑑倉殿の時既ぬ古の日もあつた

を新式とありし一々  
吾妻院室治元年の所み見ゆ

禮と振振の式ふとや一乃古儀めいありし

み等持院殿の時よききし一々式のありし

わし一しうあしけし鹿苑院殿のせめ五し

七月晦日八月朔日同三日を三ヶ月の留

物を執りてきし一々空えらしてし

大儀とふれし  
満濟准后記正  
長元年の所み見ゆ 相禁裏よりし

武家一物し里ありし亦禁裏一たし

ほらら大名諸ありし一々しり公々しり神友等み

しりしりし幕府一執一制しり返一物を

給いありしり其事一しりしり一従事しりし

所役も繁多ありし政府執事伊勢守り家

ありし代し其熱を行しりし後しりし伊勢一

家の筆右筆及し使をしりしなりしひたり

右筆をて熱奉行もしりしありし熱奉行と

むしりしりし由其所役し諸家一返一物を

終ふ處に未だ内書に酒のつゝつちりてあるは  
禁裏へ奉る料と想ふ所のうきくむたつて酒  
所の所なるといへり又八朔の當日所奉  
行とてつゝつて所奉る諸家へ送る料のう  
物を鑑定しとてつゝの品を定む所奉  
りてつゝつて同用處のうき送る所奉る

貢馬奉行

吾妻鏡云建久六年七月廿六日戊申貢馬

進免事寄於御上洛供奉不可存懈緩儀之  
由今日面々被仰付云々仲業奉行云々  
又云建長四年十一月十二日壬辰申一刻  
始御馬御覽薩摩七郎左衛門尉祐能為奉  
行云々格已上二條と鎌倉  
將軍家の奉行あり  
齋藤親基祀云寛正六年十二月廿九日貢馬  
奉行治尾管領河國通御成如先々自風呂直御成  
也

又云文正元年十一月十三日貢馬御成  
略<sup>中</sup> 爰領長 貢馬奉行治部河内守國通  
京都御軍家  
のちありあり

按貢馬法覽の云く、毎年、冬内裏に  
つぎ料の馬を御軍家内覽せしむる式あり  
其事、平皇始に、京都へ引をせしむ  
り、ひさし、御倉殿の時、殿中へは式あり  
り、利殿のせふ、ふり、爰領の亭にて、其事

阿里 但し、めのはら、御中 此のころ、文治年中

より、大に、す、代、小、後、あ、ふ、り、き、出  
る、も、つ、り、さ、ら、し、奉、行、人、此、内、より、貢  
馬、を、行、の、事、以、定、免、當、百、の、事、を、さ、し、ね、重  
河、の、か、く、大、名、諸、家、に、の、料、を、名、多、我  
引、進、す、治、り、京都、へ、ま、ま、つ、ら、海、  
す、ま、す、屋、へ、河、治、を、し、ま、す、り、あり、  
る、事、より、此、後、常、に、あり、事、程、と、貢、馬、を、行、り、し、る、名

八室所家の時より

旬御鞠奉行

吾妻鏡云建曆二年三月一日戊申可有旬

御鞠之由今日依被仰出人々不顧藝之堪

否成競望云々武州為奉行被清撰人數云

云六日癸丑幕府御鞠始也將軍家御布衣令

立給武州時房匠作時泰重胤朝盛朝直以下候

之

又云正嘉元年六月一日甲申御所旬御鞠

也為一條侍從定氏奉行催人々云云

又云弘長三年正月十日辛卯為和泉前司

行方奉行被定旬御鞠之奉行皆是所被撰

堪能也云々正月四月七月十月月上旬冷泉

中將隆茂朝臣右馬助清時出羽前司長村

中旬越前前司時廣中務權少輔重時備中

守行有下旬足利大夫判官家氏武藏五郎

時忠下野左衛門尉景綱二月五月八月十  
一月上旬二條少將雅有朝臣刑部少輔時  
基後藤壹岐前司基政中甸彈正少弼業時  
越後四郎顯時佐渡大夫判官基隆下旬左  
近大夫將監時村三河前司頼氏周防左衛  
門尉忠景三月六月九月十二月上旬二條  
侍從基長相模三郎時輔佐、木壹岐前司  
泰綱中甸中務權大輔教時秋田城介泰盛

信濃判官時清下旬左近大夫將監公時木  
二權頭親家城四郎左衛門尉時盛

按蹴鞠も鎌倉殿の時より足利殿の世まで連  
綿してありけり毎年正月より蹴鞠始  
まるといふ恒例の儀式ありしと鎌倉殿の  
時より旬の鞠とて正月鞠始ありといふ  
此事を具行きて是の家が地元の御事と  
記ふと申しあり殿上人業條家の門族の奉行人

の内業も拙より人を考ふく旬ヲ鞠奉行と定む人  
拙者も撰ひ人数を定むより始久毎時當日に可  
と奉行きくえられくあり内玉所殿の世もも鞠  
始少々宗武家の輩祇候きくくも旬ヲ鞠と  
しふも申えき又其奉行くしふもええきいふ  
定置く事ハなる事くあり

相撲奉行

曾我物語云 相撲 去程くしふくくを思ふく

むてきくく若きりりゆを鷹か里川より乃か  
足ふえちくわぎきまふぐ事くおとす  
若きくくさゆふさ始見くあきらん見物  
いふくやあまふくしひきんハソウの國の住人  
しほ乃入道きやきんみさけだのゆなり  
石あふりりの腕口よのあひまのや五郎殿  
いさり始あきこそあひごあれかききけきもあ  
ハ入道出くまきくふたんとしふ  
中 河津思ひ



きふ、いま、このとき、つゝ、おれが、さし、つゝ、おれが、  
ハ、あ、り、り、り、き、ふ、く、れ、多、く、ま、事、き、ふ、と、何  
う、あ、ひ、く、く、お、く、け、の、お、く、あ、く、く、く、度  
ハ、お、も、た、つ、ま、ま、お、を、と、思、ひ、た、お、く、何、代  
く、く、思、ふ、屋、う、さ、ふ、く、ま、の、い、ま、ま、の、大、え、む  
つ、と、え、め、や、あ、く、の、お、く、三、年、の、智、見、や、あ、く、お、事  
す、あ、く、に、お、く、一、度、も、あ、く、を、お、く、お、く、お、く、お、く、お、  
お、く、お、く、の、お、く、お、く、お、く、お、く、一、番、の、名、を、え、お、く、

す、ま、あ、り、今、く、く、く、く、く、く、物、の、お、く、も、お、く、ま、  
さ、ん、事、ハ、く、く、く、く、く、く、お、く、お、く、お、く、お、く、  
お、く、お、く、お、く、お、く、お、く、お、く、お、く、お、く、  
に、お、く、お、く、お、く、お、く、お、く、お、く、お、く、お、く、  
つ、く、く、く、く、入、お、く、お、く、

吾妻鏡云建久三年八月十四日甲寅於鶴  
岡廻廊外度放生會相撲内取手被召決云  
云藤判官代為奉行云々

又云建久元年六月廿一日辛未於御所南  
度覽相撲相州大官廣元令等被候上南御簾其  
後各進度中央決勝負朝光奉行之向後可  
奉行相撲事由云々  
同島津家本云安貞二年八月十一日辛亥  
於南度放生會被始相撲內取次有纏頭遠  
藤左近將監奉行之此莫先例有無粗雖及  
其沙汰辯未定以前早被召決

吾妻鏡云建長六年閏五月一日壬寅相州  
隨身下若等參御所給將軍家出御廣御所  
御酒宴及數献近習人々被召出之各乘醉  
于時相州被申云近年武藝廢而自他門共  
好非職才藝事已忘吾家之禮訖可謂此興  
然者弓馬藝者追可試會先於當座被召決  
相撲勝負可感否御沙汰之由云々將軍家  
殊有御入興爰或逐電或令固辭為陸奥掃

部助奉行於遁避之輩者永不可被召仕之  
旨再三依仰含十餘輩愁及手合不撤衣裳  
長田兵衛太郎被召出候砌判申勝負是非  
依為譜代相撲也一番持左三浦遠江六郎  
左衛門尉右結城上野十郎二番左大須賀  
左衛門四郎右波多野小次郎三番持左澁  
谷太郎左衛門尉右檢牧中務三郎四番左  
<sup>勝</sup>橘薩摩余一右服部彌藤次五番左<sup>勝</sup>廣

澤余三右加藤三郎六番持左常陸次郎兵  
衛尉右土肥四郎勝并持者被召御前賜御  
劔御衣等雲容取之負者不論堪否以大器  
各給酒三度御一門諸大夫等候杓凡有興  
有感時壯觀也  
按以上吾妻鏡四條之錄  
倉好軍宗の奉行たり  
安土日記云天正六年八月十五日江州國  
中京都之相撲取千五百人安土へ被召寄  
御山ニテ辰ノ刻ヨリ酉ノ刻迄トラセテ

御覽候各我手ノ者共ヲ被<sub>レ</sub>召連<sub>レ</sub>則御奉行  
被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>ル、御人數津田七兵衛堀久太郎万  
見仙千代村井作右衛門木村源五青地與  
右衛門後藤喜三郎布施藤九郎蒲生忠三  
郎永田刑部少輔阿閉孫五郎行事八木瀬  
藏春庵木瀬太郎太夫兩人ナリ小相撲五  
番打人數之事五番打江南源五京極五番  
打深尾久兵衛木村源同勤八布施藤九同  
郎内小者同

地藏坊久太同麻生三五後藤同藪下蒲生  
以上大相撲三番打人數之事三番打水村  
伊小助木村源三番打靖井次兵衛瓦園同  
山田與兵衛布施藤同麻生三五後藤同長  
光同青地孫次郎同ツカウ同東馬次郎同  
夕<sub>イ</sub>トウ同圓淨寺源七同大塚新八郎同  
七シヤ以上大形相撲終リ既及薄暮永田  
刑部少輔阿閉孫五郎強力ノ由連<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>及

聞召兩人ノ勸御覽セラレ度被思召右御  
奉行衆ノ相撲御所望也初ニハ蒲生忠三  
郎万見仙千代布施藤九郎後藤喜三郎  
ラレ後ニ刑部少輔阿閉誓少手合ニテ  
マレ候勿論阿閉器量骨柄勝レ候テ力  
強事隠テク候一共仕合候力惣別強ク候  
力刑部少輔勝相撲也其日ハ珍物調へ終  
日取替ニ御相撲取ニ下サレ候度ニ能

相撲仕候者被召出人数之事東馬次郎夕  
イトウツカウ妙仁トシヤ助五郎水原孫  
太郎大塚新ハアラ鹿山田與兵衛圓淨寺  
源七村田吉五麻生三五青地孫二郎以上  
右御相撲取召出サレ何レモ熨斗御腰物  
大小二ツ宛并呉服上下御知行百石宛私  
宅等迄被仰付都鄙之面目忝次第ナリ八  
月十七日播州ヨリ中将殿被納御馬九月

九月安土御山ニテ相撲トラセ中將殿北

畠殿御見物

室所殿物語云相撲八月十五日秀次公ハ

とや〜今宵々すまひをそせ見物と〜

用意は〜御出されは〜御奉

行の丹州を免され〜則方々を

まらぬ事。去程ハ洛中洛外從鳥羽桂坂鞍馬

白川山科碓礮庭〜も名阿のふと乃取手

とも神〜とあつまり〜秀次公の〜

も百人は〜東行〜やみか〜

諸方乃秀公ハ南西の〜二三百と〜

の事

按公家〜お横筋〜年〜の七月

た〜隊武〜古手〜の〜なる武

家〜と娘侍の武〜事〜

時〜角力代行〜事〜奉り

を定免らぬ———吾妻院見えし後ふ  
そ以てお撲人———お小の定められし御  
の内力量ありしを操ひて角力をとせし  
し———  
御家創業以前は徳国の武士もお撲節  
お守りし———うえをのつ———お藝をも  
侍———  
———を奉りし事———のかはりぬ  
奉りしは即ち奉りし———はぬおと相  
撲の古實ぬ通きなる人もも人思ふに奉り  
し———  
お小の侍———思ひ違ふおと

おれは室町殿のせしえお撲の事———  
———やた———お小の所あるは定めし難  
思ふに———唐苑院殿慈恩院殿とてお小の花美をせしめ  
まれに藝をの———お小の———お小の  
お藝はまたま———徳国の大名家ぬの侍りし———  
———御倉殿の時ぬも重きぬ———お小の  
お小の———由吉素鏡  
お小の———織田豊臣の侍り  
———大名諸家もお小の侍りし  
———折みふ———角力を思ひし  
ありしをたのづ———相撲奉りしお小の

もいふまゝにありては世にても家にもお模入を  
願ふるを置らざるありては事ごとくまて

今ハあきあきおぼやかりしと云ふ  
越前お庄より限  
役附お模入

お配方よりしりし即百石のとのり四人ありて是即お模  
奉りしよりしりの世にも是程お手あると稱ししお模入  
をやらしあり置あま  
まゝありなきおありし



武家名目抄第卅八冊

お模入所取のせももお模の事しりたりし

よりやたしりし見し所あることお定まり

明治十一年四月  
加藤養正

校

お模入の事しりし見し所あることお定まり  
よりやたしりし見し所あることお定まり  
よりやたしりし見し所あることお定まり



